

## 審 査 の 結 果 の 要 旨

氏 名 李 美淑

本研究は、1970年代～80年代における、韓国の民主化運動に対する支援と連帯をうたった「日韓連帯運動」を事例に、市民たちが形成するトランスナショナルな公共圏および越境したコミュニケーションによる連帯のあり方を、メディアの言説分析とともに理論的かつ実証的に問おうとするものである。

以下、論文全体の構成を説明する。

最初に、ハーバーマスの公共圏論およびフレーザーのトランスナショナルな公共圏論を中心に、トランスナショナルな公共圏に関する理論的考察が行われる。その上で、コミュニケーション的行為を前提としたトランスナショナルな活動家たちのネットワークが、トランスナショナルな公共圏の実態的事例と見なすとして、本論文の骨格となる理論部分を説明する。

次に、「トランスナショナルな連帯」概念の分析が行われる。憲法的、民主的な普遍的価値を中心としたコスモポリタンな連帯への議論、ならびにポグgersらが主張するグローバルな政治経済構造が生む不正義への制度的責任や政治的責任に基づく連帯への議論を考察した上で、本研究も普遍的、民主的価値とともに、他者との相互依存、相互責任に基づく連帯という意味における「トランスナショナルな連帯」が考察の対象となることを明らかにする。その上で、本論文は、トランスナショナルな連帯が、他者と自己の関係性を省察、認識し、自己のあり方を変革していく「再帰的民主化」をもたらすことに注目する。

以上のような理論的考察をもとに、本論文は 1970 年代～80 年代における「日韓連帯運動」を事例として提示し、その言説空間の形成過程を分析する。この事例では、日韓連帯運動の主体（アクター）たちに対する聞き取り調査と、そのフォーラムであった総合雑誌『世界』を中心とする「連帯」言説のフレーミング過程分析という 2 つの方法を採用している。このほか、参加者による自伝、資料集などの二次資料とともに、当時のチラシ、ポスター、宣言文、機関紙などの資料も分析に用いた。

本研究における事例分析においてもっとも興味深い部分は、日本の市民活動家たち、および外国人宣教師を含むキリスト者のトランスナショナルな情報交換ネットワークが、韓国の中で抑圧された人々の声を世界中に発信し、それが韓国の民主化に極めて重要な役割を果たしていたことを緻密に実証している点である。そして、こうした国際世論形成に貢献した韓国人による対外発信の代表的な例として、著者は日本の岩波書店発行の総合雑誌『世界』に連載された T.K 生の「韓国からの通信」（1973 年～1988 年）を挙げている。この連載は、

キリスト者を中心としたトランスナショナルなネットワークがあつてこそ可能であつたとし、日本での出版後、さまざまな言語に翻訳され世界中に流通した。

以上のような事例分析の後、著者は、コミュニケーション的行為を内包するトランスナショナルな公共圏と連帯が他者へのエンパワーメントだけでなく、再帰的に自己の社会をも民主的に変えていく原動力にもなっていたことを明らかにした。著者は、このような 80 年代までの日韓連帯の再帰的民主化過程を押さえた上で、それがやがて日本側の 1990 年代の「河野談話」「村山談話」などに結実し、植民地過去清算への努力と未来志向的な日韓関係を下支えする土壌ができあがっていたのではないかと推察している。

他方で、今日の日韓関係および東アジア情勢は、排他的ナショナリズムの高揚に直面している。今後、市民参加型が容易に実現するネット時代の新たなメディア環境の中で、市民社会のトランスナショナルな公共圏と連帯はどのような発展を遂げるかは注視すべき課題であると論文を締めくくっている。

以上が概要であるが、審査員からは本論文のいくつかの不足も指摘された。一点めに、言説分析部分において、日本側の活動家のものが主となっており、韓国活動家側の民主化過程における言説、また雑誌『世界』に連載された T.K 生「韓国からの通信」そのものの言説分析がないため、韓国民主化運動家側と日本およびキリスト者ネットワーク側との連動や共鳴をはじめ、齟齬や葛藤などのダイナミズムが十分描ききれていないことが指摘された。二点目に 70 年代、80 年代との約 20 年のタイムスパンを均質的にとらえがちな点も指摘された。三点目に「メディア」という言葉が、雑誌媒体に限定されており、そうした限定的な提示の理由について説明が必要であると同時に、そのほかの可能性への考察を深めてもよかったのではないかという指摘もあった。

しかし、こうしたいくつかの不足があるとはいえ、「トランスナショナルな公共圏」という、これまでは理論的な枠組みの中で、しかも欧米の文脈で語られてきた概念を、東アジアの事例とともに実証的に追尾した点で本論文は優れており、学問的貢献も大きいという点で審査員全員の意見が一致した。また、従来のメディア研究の大部分がナショナルな枠組みの中で行われてきたことに鑑みるならば、本研究の斬新さは国際的にも最先端の流れに位置し、一頭秀でたものである。また、韓国という一国家の民主化過程を、日韓関係および両国の市民的連帯と社会運動、さらにはコスモポリタンなキリスト者ネットワークによる情報交換の役割とともに議論し、「民主化」というプロセスを一国の政治制度に限定することなく、より広義な理念につなげ留めつつ実証的に描いている点は、きわめてオリジナリティの高い学問的貢献であると考えられる。

以上、本論文はメディア研究としての学問的貢献とオリジナリティに富み、博士（社会情報学）の学位請求論文として合格と認められる。